	2015年7月18日 46号
	発行者 鈴木 克彬 発行所 ぐんま日独協会 〒371-0105 群馬県前橋市富士見町石井 2445-219 電話 : 027-288-4297 E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



【「第6回ドイツフェスティバル in ぐんま」オープニングセレモニーで挨拶する在日ドイツ連邦共和国大使館ヘルツベルク首席公使】

1. ハイマート 46 号に寄せて (会長のことば)	2
2. 「ドイツフェスティバル」日独ごみ問題パネル展示を終えて	3～5
3. 「ドイツフェスティバル」販売および音楽コーナー	6～7
4. 独俳 (ドイツ語で俳句)	8
5. 欧州旅行記 - 東大ラリーチームに参加して	9～11
6. ドイツの寿司と日本食ブーム	12～13
7. デザイナー修行奮闘記 (連載-6)	14～15
8. 総会報告	16

1. 第6回ドイツフェスティバル in ぐんま

成功裏に終わる・・・関係者の尽力に感謝

会長 鈴木克彬

平成27年(2015年)6月26日(金)27日(土)28日(日)の3日間、群馬県庁1階ホールにて、ぐんま日独協会主催の第6回ドイツフェスティバル in ぐんまが来場者延1万人以上の方々をお迎えして成功裏に開催されました。

経緯と目的

この催しは、今から10年前の2005年、『日本におけるドイツ年』を記念してドイツ大使館からの要請で開催されたもので、隔年で開催し、今回は第6回目になります。目的は群馬県民の方々にいろいろな面からドイツについてご紹介し、ドイツの良さを知っていただくとともに、日本とドイツの更なる友好親善に役立つことを期待しています。

内容・3本柱

内容は、

- (1) 動としてのドイツ音楽の生演奏やフォークダンス等の音楽コーナー
- (2) 本物のドイツパンやソーセージ、ビール、それに木製玩具、靴等ドイツのこだわり品の紹介販売
- (3) 知的研究をテーマとした展示コーナー。の3本柱で毎回進めています。

ハプニング・・・NHKの事前告知放送とその反響

実は今年、ぐんま日独協会事務局員Uさんの尽力で、NHKが6月26日(金)、夕方の番組『ほっとぐんま640』で5分間、初めてドイツフェスティバルの内容を紹介してくれました。その反響は絶大で、本物のドイツパン、ドイツソーセージを求めて、開会時刻前からお客様の行列が出来、2時間から3時間程で連日、当日分が売り切れという状態になってしまいました。改めてNHKの告知力、影響力に感服した次第です。

一方、折角お見えくださったお客様に「済みません。売り切れです」という“つらい言葉を発する”初経験のドイツフェスティバルでした。

ご尽力くださった関係者へのお礼

いずれにしても、盛大且つ成功裏に開催することが出来たドイツフェスティバルだったと思います。心から群馬県庁の方々をはじめ、関係皆様及び協会員皆様のご尽力に感謝し、お礼を申し上げます。

2. 「ドイツフェスティバル」日独ごみ問題パネル展示を終えて (遠藤 功 記)

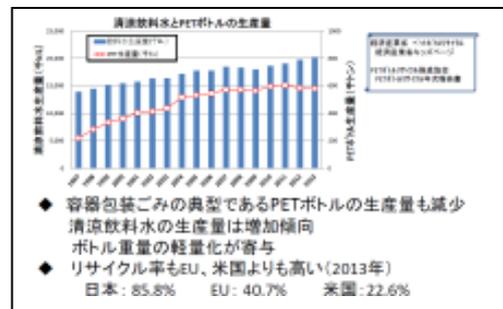
かねてからドイツサロンにおいては、日独の生活や習慣の違いやその根源にある民族性などが好んで議論されてきました。その中でごみ問題も何度か話題に上り、日独の分別方法や収集料金などの違いについて意見が交わされておりましたが、正直なところ私にとってはそれほど興味の湧く事柄ではありませんでした。なぜなら分別はかなり面倒と聞いておりましたが、家族にまかせっきりであったためか直接携わったこともなく、またごみの税金納入も会社持ちであったためか、正直なところあまり記憶に残ってはおりませんでした。ごみ(資源)の再利用やリサイクルなどについては、ドイツに移る前に単身で住んでいた頃のオランダの方が、より先進的に取り組んでいたのではないかと考えております。今回のパネル展では残念ながらオランダの例を紹介する機会に恵まれませんでした。飲料水のペットボトルや有名メーカーのビール瓶をデポジット方式で回収後、洗浄・再充填して販売するリユース(再使用)がドイツよりもかなり進んでいたように思います。またフリーマーケットなども各地で定期的に行われ、不用品の超廉価販売が徹底しておりました。オランダ人は世界で一番合理性の発達した(別の言葉でいうと世界一のケチ)民族といわれており、その徹底ぶりは「世界から畏敬の目で見られがちなドイツ人の合理性」と並んで見習うべき点が多かったと考えております。

冒頭から視点が他の国に反れてしまった感じになってしまいましたが、今回のドイツフェスティバルのパネル展示のテーマの選定の経緯や経過を多少述べてみたいと思います。テーマについては他の例にもれず、選定はかなり難航したと思います。観光や旅の紀行的なものでドイツを紹介することは一般の参列者にはとっつきやすく印象にも残りますが、ドイツとの文化や人的交流を図るという観点からは、多少インパクトに欠けるという共通認識がありました。やはり、日独協会としては国情や民族の違いを背景とした何らかの主張や有用な提案になるようなものがよいとのことで、このごみ問題と真正面から取り組むことになった訳です。つまり私たちが見聞きしたドイツのごみ削減のための法体系や住民レベルでの分別などの取組を紹介することにより、我が国や群馬県のごみ問題の改善に微力ながらも貢献ができればと考えた訳です。一見大それた目標のようにも思えますが、この問題は最終的には住民レベルの意識の問題にも大きく関わっていることを、いろいろな場面で実感してきた人たちが多かったためとも思われます。

このような細やかな問題意識から検討を進めていった訳ですが、大きな障害となったのはドイツの最新の情報収集が意外と困難であったことです。ドイツの専門的な情報については、日本語サイトはほとんど役に立たず、更にはドイツ語サイトにアクセスし、かつ慣れないドイツ語を駆使(?)して探し回っても一向に有用な情報は得られませんでした。このような約1か月の暗中模索の末、最後の手段としてドイツ人のかつての同僚(化学系)に調査を依頼しました。ごみ問題も環境や化学の範疇に入るため、専門知識を活かして検索すれば難なく有用な情報にたどり着

けると考えたからです。しかし結果的にはドイツのこの種の最新の情報はインターネットには公開されていないとのことで、彼が苦心して集めてくれた少ない情報を「ドイツの現状」と位置付け、そこから結論を導くことにしましたが、両国の比較のためには決して十分とは言えず今後の課題と思っております。

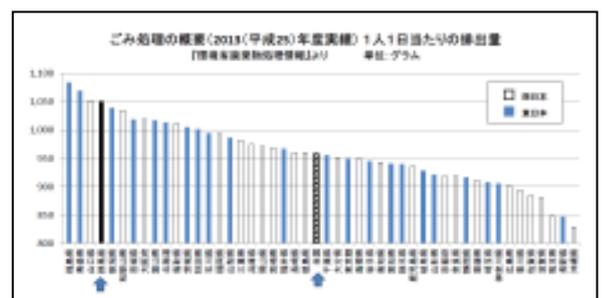
一方の日本の情報としては、環境庁やリサイクル協会などが年次に報告する最新の膨大な資料が簡単に入手できました。それによると約10年遅れでドイツの法体系を基本に、主要システムを構築した経緯が読んで取れました。その主眼は工業的な取り組みが可能なりサイクル（再生）の分野に置かれ、日本独自の技術革新もあり、最新ではリサイクル率で世界のトップを実現しておりました。さらにごみ排出量も本家のドイツと劣らぬ実績を上げている事実が分かってきました。これは望ましい結果ではありますが、当初掲げたテーマの方向性とは異なる結論となり、ストーリーの構成上望ましくないものでした。



【日本のリサイクル率が高いことを示すパネルの一部】

このような時期にドイツサロンの例会で、途中経過を披露することになり、前段の調査結果を中心に発表致しました。参加者からの忌憚のないご意見の中で、「ドイツの実情と日本の実態は理解できたが、結論としては一体何を言いたいのか？」という一番痛いご指摘がありました。残念ながら現在模索中としか答えられませんでした。

このように全く行き詰った場合は基本的に帰るのが鉄則ということで、改めて当初検討された方針を見直しました。そこには滞在先あるいは訪問先としてのドイツのスーパーや街角で見たごみ対策の実例や、簡潔な法体系の説明など十数項目が記されておりました。一方日本の実情と群馬県の不名誉としか言いようのない現状とが対比されておりました。これらとそれまで調査した内容を突き合わせているうちに次のような明快なストーリーが構成されていくのが実感できました。それは



【群馬県の不名誉な実情を示すパネルの一部】

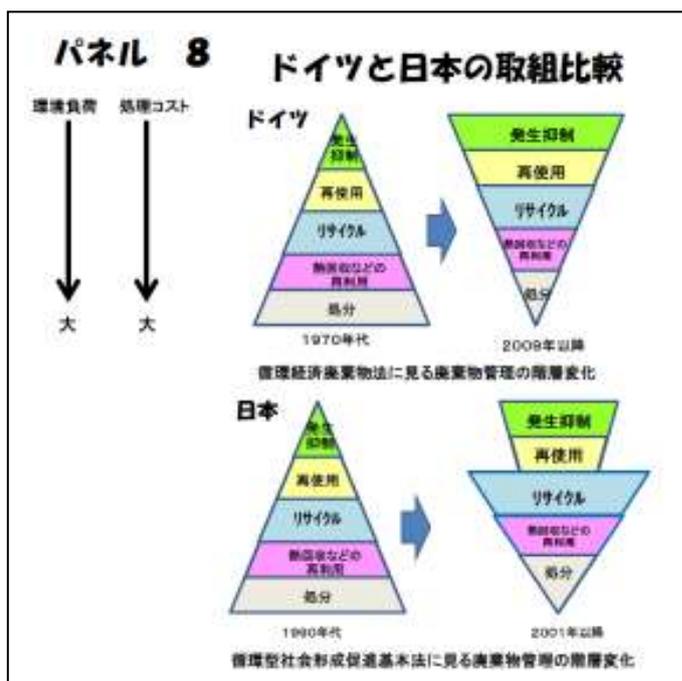
ドイツのごみ削減の法制化とシステム化を10年遅れで取り入れた日本は、リサイクルでの実績は世界のトップレベルになったが、「ごみの発生抑制」というドイツの基本理念の実現には更なる努力を必要とし、かつこれから一層の改善が期待される群馬県にはドイツの住民の取組を紹介することで支援を加速するという構成でした。さらにエンディングの提案を付け加えて全体の構成が出来上が

ったのが 1 週間前で、校正などを経て印刷に至ったのが実に開催日 2 日前で、全くの滑り込みセーフという状態でした。

今回の展示において、極力避けるように申し合わせてはありましたが、テーマの性格上ある程度の政治的な要素も持たざるを得ませんでした。それ故、ドイツ首席公使は別格としても、群馬県選出の現職と前職の国会議員への説明や、市議会議員の来訪という名誉な局面にも恵まれました。また県の所轄部門である環境森林部の方々への説明や、有識者などの説明や討論によりさらに認識を深めることもできました。特に数名の方々は事前に展示内容の情報を得ていたらしく、この説明の聴取のみを目的として来訪されたようであり、ご多忙らしく他の催しにはほとんど立ち寄らずに足早に去っていかれました。このような方々はテーマに関連する方面で活躍されているように思われましたが、特別なコメントや質問はありませんでした。むしろ主婦からはいろいろ考えさせられる素朴でかつ鋭い質問を幾つか戴きました。



【熱心に説明に聞き入る来場者】



【ドイツと日本のコンセプトの違いを簡潔に示したパネルの一部。日本はリサイクルでは進んでいるが根本の発生抑制の面では改善の余地がある】

今回のパネル展示は私たちの能力をかなり上回った難しいテーマであったと思っております。会長や事務局員及び多数の会員や協力者の方々の導きと支援により、何とか最終段階まで漕ぎ着けることができましたことを、心から感謝致したいと思います。お陰様で参加者の方々にも大いに興味を持って戴くことができたと思っております。このような調査と提案が今後の関係者の今後の活動の一助になればと心から念じております。

3. 「ドイツフェスティバル」販売および音楽コーナー （ザビーネ・グリシュカ 記）

An die Freude (und die Freundschaft!)

～歓喜（と友好）に寄す～

「ドイツフェスティバル in ぐんま」は今年で6回目の開催を迎えました。6月27日・28日に初めて参加させていただいた私にとっては、感動と新たに学んだ事でありふれたイベントとなりました。その感想をここでお伝えしたいと思います。

まず驚いたのは、来場者の数でした。初日もたくさんの方にご来場いただいたと伺いましたが、フェスティバルの様子がNHKによって放送されたこともあり、二日目は朝早くからさらに多くの方がドイツを楽しみに会場である県庁に集まりました。



【NHKの取材風景】

学生の頃にパン屋さんでアルバイトしていたので、ドイツパンの魅力はよく知っていましたが、出来るだけ多くの方々にお楽しみいただけるように、購入できる個数を制限することは、初体験でした。また「Kaiserbrötchen」だけでなく、日本であまりなじみがないと思われるソー生地のパンも大人気であったことは、とても驚いたとともに嬉しくもありました。



【大活躍のタベアとザビーネ（右）】

ソーセージもパンも両日ともに早々の完売となり、群馬の多くの方々にドイツの美味しさを体験していただけたのではないかと思います。しかしながら、楽しみにしていたのに好きなだけ購入ができなかった方には、申し訳なくも思いました。



【大人気のパン・ソーセージ販売】

「ドイツフェスティバル in ぐんま」ではドイツ製品の販売のみならず、パネル展示とイベントコーナーにおいてもドイツの様々な面が紹介されていました。出演者として参加させていただいた私には「ドイツ音楽コーナー」が最も印象的でした。「みんなで歌おう！ドイツのうた」というタイトルで、ドイツ語の発音のポイントを抑えながら、来場者と一緒にドイツの民謡とベートーベンの「第九」にある「歓喜の歌（An die Freude）」を歌いました。

ドイツ人の私はあまり大きい声では言うてはいけないのですが、実は、「第九」を歌うのは今回が初めてでした。そのため、ステージに立ち、来場者と一緒に歌うのは最初は少し不安でした。「音程が合わなければどうしよう！」「歌詞を間違っちゃったらどうしよう！」などと心配だった私は、事前にカラオケで練習することにしました。「歓喜の歌」を何度も歌い、ようやく満足に歌えるようになった後、「ぶんぶんぶん (Summ, summ, summ)」や「かえるの合唱 (Froschgesang)」もカラオケにあるのかな？と思って検索してみたところ、なんと！両曲ともありましたので、早速そちらの歌も練習しておきました。発音の説明には音楽コーナー担当者の瓜生さんから丁寧にアドバイスをいただきましたので、準備万端で、ほんの少しだけ緊張しながら「みんなで歌おう！ドイツのうた」をたっぷり楽しめました。ドイツ人の私より日本人が「第九」を知っていること、また「第九」のみならず、ドイツの民謡を歌うときにも来場者の方々が積極的に参加してくださったことも大変感動しました。



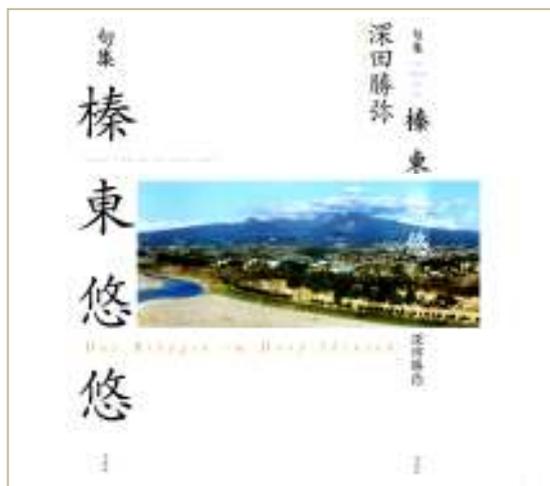
【ドイツ語の歌詞指導するザビーネ】

最終的には、ドイツを紹介するためにお手伝いで群馬にきた私は、いろいろと学びました。また、かけがえのない思い出を作ることができました。こうした機会をくださったぐんま日独協会の皆様に心から感謝いたします。

4. 独俳（ドイツ語俳句） — 連載 1 （深田 勝弥 記）

○はしがき

私は退職後には、住んでいる榛東村で悠々と過ごしたいと思い、15年ほど前に「榛東悠々」なる題名をつけて手製の句集をつくりました。その後、纏めとして、これをドイツ語に訳して『榛東悠悠』なる冊子にしました。まだこの冊子に愛着がありますので、ここから選んだ句にそって、話を進めたいと思います。もちろん句もドイツ語も未熟ですが、どうかお読み捨てくだされば、幸いです。



○ドイツ語の俳句を始めたきっかけ

もう5年以上前のことで、どこかの新聞で、外国語の俳句を募集していることを知りました。ただし応募ができるのは英語とフランス語だけとの事で、なぜドイツ語が駄目なのか不審に思い、それならば自分でやってみようと思いました。また私の造語で、ドイツ語で書いた自分の俳句を「独俳」と名付けました。

○1999年夏 鎌倉で退職

私は6年間鎌倉（正確には大船ですが）での仕事を終えた夏。この日は梅雨の終りごろで、蒸し暑い道を妻と手荷物を持ち、未練やら安堵感やら、いろいろな思いがないまぜになって、大船駅まで歩きました。その時の俳句です。

片蔭へ 重き歩みや 古都を去る

In den Schatten gehend,

Verlasse ich gerade

Diese alte Stadt

イン デン シャッテン ゲー エンド
フェアラッセ イッヒ ゲ ラーデ
ディーゼ アルテ シュ タット

日陰の方へ歩きながら
私は今去ろうとしている
この古い街から

- ★ カタカナはドイツ語読みをなぞったものです。下線部分が音節部分で五・七・五・の俳句の音節になっていると思っています。
- ★ 小文字はドイツ語の句（独俳）を日本語に戻したものです。

5. 東京大学 海外ヒストリックラリー参戦プロジェクト2015に参加して

(藤坂 浩史 記)

東京大学の授業の一環として行われている「海外ヒストリックラリー参戦プロジェクト2015 Team剛」の欧州活動サポーターとして2月24日～3月28日の間、参加させて頂いた。このプロジェクトは授業であり1年半と長期に渡って学生達がラリー自動車の製作や広報活動、資金調達、自動車輸出入などを行い、最後に欧州で行われるラリーに参戦する。私がこのプロジェクトに参加したきっかけはモータースポーツで知り合った東京大学運動会自動車部のメンバーからの誘いであった。実際にプロジェクトの現状を聞くと過酷な状況ということを知り、学生達が壁にぶつかった時にアドバイスが出来るか自分への挑戦でもあった。

今回は欧州で行われた3つのラリーに参加することになった。1戦目はオランダのHorneland Rally、2戦目はスペインのRally Costa Brava、3戦目はフランスのRallye de Parisと毎週欧州各地で行われた大会に参加し、大きなトラブルもなく無事完走することができた。小さなトラブルは多々あったが学生達が解決をし、時には一緒に徹夜作業したことも良い思い出になった。しばらく会社員として安定した生き方をしていた私は久しぶりのドキドキや達成感を味わうことができ、このプロジェクトの参加は間違っていない選択であった。



この欧州での活動期間に3日間だけ旅行が用意されていた。その行き先がドイツであった。ドイツ旅行のスケジュールも大よそのルートは決定していたが詳細なスケジュールが決まっておらず、プラン作成をサポートさせて頂いた。1日目にStuttgart南西にあるNufringenの宿へ、2日目はMercedes-Benz MuseumとRobert Bosch GmbH、3日目Technik-Museum Speyerと決まっていた。1日目はNufringenに向かう途中にあるHeidelbergで観光案内を買って出た。

2015/02/26

オランダ Amsterdam の北に位置する Egmond-Binnen にある宿から学生達と出発し Heidelberg に向かう。移動は主に高速道路だが日本から持ち込んだワゴン車 2 台は 130km/h で巡航している欧州車の流れに乗るのは若干の恐怖を感じた。追越すためアクセル全開すれば車体の剛性感の無さやブレーキの不安さを常に感じ、周りを走る欧州車のタフさを感じた。PA のファストフードで昼食を取り、夕方 Heidelberg に着いた。

しかし予定より相当遅れたため、1時間しか観光できないとプロジェクトリーダーからの指示があった。出発時間に合わせ観光地とルートを考え、学生達の案内をした。学生達は今まで滞在していた Amsterdam と雰囲気が大きく異なる Heidelberg を気に入ってくれていたようで街を歩くごとに出発時間という制限は忘れ去られた。学生達からの提案があり Heidelberg で夕食を取るとのこと。郷土料理と美味しいビールが飲めそうな店を探し入りお薦め料理とビールを紹介。私もビールを飲みたかったが、宿までの運転があるため Alkoholfrei を選択した。美味しい食事と共に時も過ぎ Nufringen の宿には何時に着くのだろうと。宿のチェックイン時刻も迫る中 Heidelberg を出発した。Nufringen の宿に着くと学生達には現実に戻り残った作業に精を出していた。



2015/02/27

Nufringen の宿から Mercedes-Benz Museum に向かう。Mercedes-Benz Museum では予定していた工場見学が都合によりキャンセルとなり時間に空きが出てしまった。空いた時間を有効活用するため近くにある Porsche Museum 見学を提案し向かった。メンバーの一員が Mercedes-Benz Museum に重要な携帯電話を忘れたというハプニングがあり一部のメンバーが探しに戻る。無事に受付に届けられていたようで、届けてくれた方



には感謝したい。Porsche Museum 見学の後には Renningen に完成した Robert Bosch GmbH

の見学をした。この場所にはまだ日本人がほとんど訪れていないとのこと。自動車の最新技術などを紹介して頂いた。Robert Bosch GmbH 見学後は Robert Bosch に勤務する方とインターンシップに参加している学生達、プロジェクトメンバーで夕食に行き、また前日と同じ様に楽しいひと時を過ごし、Nufringen の宿へ。

2015/02/28

Nufringen の宿を出発し Speyer にある Technik-Museum Speyer へ見学。いろいろ奇抜な展示に学生達は興味津々に見学していた。学生達は見学後にゴーカートで競ったり公園で遊んだりとなかなか元気が良い。見学が終わると Speyer にあるピザ屋で昼食。ピザのサイズが3種類あり、価格も良心的。今までの経験から普通サイズに。学生達は大きなサイズを注文していたが、食事がテーブルに



並ぶとピザの大きさにテンションも最高潮に。しかしお腹が膨らむにつれテンションは下がり、大食いの学生もギブアップしていたようだ。ドイツの物価や料理の量は非常に良心的だと感じた。お腹も一杯になったところで 550km 先にあるオランダ Egmond-Binnen の宿へ向かった、そして楽しいドイツの旅は幕を閉じた。

今回の欧州活動ではオランダ、ベルギー、ルクセンブルク、フランス、スペインそしてドイツを移動した。その中でもドイツのイメージ（特に Heidelberg）は学生達に好印象を与えたと思う。

今年度は「TeamMUSASHI」というプロジェクトが既に活動している。このような実践型教育が日本全体で行われれば即戦力の良い人材育成にも繋がり、グローバル社会にも対応でき、日本の明るい未来も期待できるだろう。

今年度もものづくりや欧州（特にドイツ）についてサポートの依頼があれば提供して行きたい。



海外ヒストリックラリー参戦プロジェクト

- Team剛（2015）
<http://ameblo.jp/univtokyorallygo/>
- TeamMUSASHI（2016）
<http://rallyemusashi.com/>

6. ドイツの寿司と日本食ブーム (マンハイム在住 大和田邦子 記)

ここ5, 6年前からドイツは急激に寿司ブームとなり、街にはお寿司屋さんが次々と誕生した。私が住むマンハイムは人口30万人の小さな町だが現在お寿司が食べられる和食の店が10軒もあり、そのうち寿司専門店が7軒、4軒は回転寿司で2軒は水をはった細い川を糸でつながれた小船がお寿司を運んでくる、というものでなかなか風情がある。夜は絶対予約が必要のお寿司屋もある。不思議なことに日本人オーナーの店はない。



15年ぐらい前はドイツ人に、日本人は生魚や(黒い)海草をよく食べる、と言うとそれは食べられない、という顔をされたので。和食の話はしないことにした。

いつの日か理由はわからないが気が付くとお寿司屋と和食屋があちこちにできている。果たしてお客さんは入るだろうか。開店したばかりのお寿司屋を見て夫(*編集者註:ご主人はドイツ人)は大喜び、早速入ってみたがお客さんは閉店まで私達と、あと一組しかいなかった。親切な韓国人のオーナーは日本語がペラペラ。上野のお寿司屋で2年働いていたそうだ。シャリの味は日本とそっくりだし、珍しくネタも大きく新鮮なので何回も足を運んだ。でも客入りは相変わらずでそのうち店じまいするのではないかと心配していたが、1年、2年たつ頃から客足は徐々に増え、夜も満席になるほどになった。

ある時、お寿司が大好きな夫はお寿司を知らない同僚を誘ったら同僚はとても感激し、お寿司屋に度々行きたがるようになった。行くといつもふたり前は注文する。他の同僚は初めての生魚なのにいきなりお刺身を注文したので驚いていたら、あつというまに食べてしまい「とてもおいしかった」と言った。ドイツ人の好みの変わりようには目を見張る。夫を取り巻く同僚でお寿司好きな人は少なくとも5人はいるだろう。

去年マンハイムに大きいアジアスーパーができた。親切なベトナム人の若い女性オーナーと親しくなり寿司ショーを依頼された。客のリピーターが多く当日は大入り満員になった。ドイツ人は絶対しないであろうお寿司の無料試食では皆おいしいと言ってくれ、おかわりする人や巻きす、寿司型を含めてお寿司の材料を一式買っていく人もいた。一人のドイツ人客からは、プライベートのすしコースを頼まれ、今年の2月にお宅に伺い、6人の参加者にお寿司の手ほどきをした。参加者はみな友達同士なのでかなり盛り上がり、私達も日本について話したりいっしょに会話を楽しんだ。



【巻きす (簾)】

さて、ブームはお寿司だけではなく和食にまで広がりつつある。夫は生涯教育学校（Volkshochschule*）に勤めており、担当は語学コースだが和食が好きだからか2013年始めから日本料理コースをアレンジしてくれている。年2回、それぞれ違う開講場所ではほぼ毎回12人の定員に達するし、例外で13人になったこともあった。和食はお寿司だけではなくたくさんの趣向を凝らした料理があることを知ってもらうだけでなく、一緒に作り、味わってもらおうと私も意気込んでいる。2014年からは「和食は世界無形文化遺産である」、と毎回忘れずに言うことにしている。

*編集者註：Volkshochschule（市民の学校、通称：VHS）は市または州によって運営されている市民の為のカルチャースクール。一般に、大都市ほどいろんなスキルを持った市民が居住しておりバラエティーに富んだコースが存在する。

日本語コースと同様料理コースも色々な発見があって面白い。初めて和食を作る人が殆どだから、日本人が当然と思うことを知らないのは当たり前。何回も予想外のことが起こった。親子どんぶりの具をかき混ぜたり味噌汁が辛すぎたり、ご飯を鍋で炊いている最中にかき回したりふたを開ければなしにする、またご飯がどういう状態になったら炊き上がりなのかわからない、酢飯の酸味が強すぎて食べられないなど。これらは私自身、起こってからでないと気が付かないので困る。皆に配るレシピに書いてあってもその通りにしない人もいるし、私の書き方が足りないケースも多い。細心の注意が必要である。

ちなみに今まで手掛けた主な料理は茶巾寿司、筑前煮、鶏のから揚げ、魚の照り焼き、豚の生姜焼き、ニンジンの白和え、和風サラダ（きゅうり、なす、とうふ、わかめ、しらがねぎと酢味噌）、親子どんぶり、ごはん、味噌汁などである。コースの前は、参加者の口に合うか、うまく出来上がるか心配だが、皆さんそれらしいものを作るし、味も気に入ってくれるので嬉しい。

料理コースはかなり労力を要するので夫の手伝いなしではとてもできない。まず組み合わせを考えながらごはん、味噌汁を含め、5、6種類の料理を選択する。レシピをドイツ語に訳し夫がチェック、事務所で人数分コピーしてもらう。当日の朝、忘れ物がないようにリストと照らし合わせ、生もの以外の材料、調味料と台所用品など（特に小さいもの、小なべ、小ボール、まな板、計り、汁椀、はしその他必要物）を夫の車に積み込んで仕事に行ってもらおう。私は午後生ものを買って、豆腐、みそなどの冷蔵品を持って夫のオフィスに寄り一緒に会場に向かう。会場には1時間前に着くようにし、参加者が、計る分量を間違えないように、また材料を必要以上取らないように始まる前に分量を計って料理別にお皿に載せ、グループ単位に準備する。このやり方は貴重な経験に基づいている。コースが始まったら日本の調味料の説明をし、参加者と一緒にレシピに目を通して調理開始。うまくできるかな、と思いながら各グループを回ってコメントを言ったり質問に答えたり終始動きまわり、夫は最後までアシスタントを務める。このようにして調理、試食、片づけが終わる約4時間後の9時過ぎに解散となる。

料理コースは日本語コースより参加しやすく広い層の人に喜んでもらえる。私は和食の専門家ではないが料理を作るのは好きなので更なる日本文化の紹介に貢献できればと思っている。

7. デザイナー修行奮闘記 — 連載 6 (井上 晃良 記)

語学学校での生活

ブレーメンへ到着して約一週間後、語学学校の授業が始まった。学校はやはり石造りの立派な建物で、天井の高い広々とした空間は居心地の良い雰囲気である。1階には、事務室や生徒が集えるちょっとしたラウンジなどがあり、2階以上が教室となっている。教室の定員は25名。これはドイツでの標準である。理由は、それ以上だと生徒が教師から満足な授業を受けることができなくなるからだそうである。これは日本での語学学校でも同じ基準で授業が行われていたので、現在少子化によりようやく日本でも少人数学級が行われて来ているが、小学校から高校迄1クラス40人以上であった私には驚いたことの一つである。と同時に、授業を受けながら、25名クラス体制には妙に納得したのである。

入学手続き時には、新生は全員面接が行われる。もちろん相手は日本語を話せないドイツ語教員である。ここでドイツ語で簡単な質問をされて、そのやりとりを見てクラス分けを行うのである。私のドイツ語能力は極めて酷い状態であったと思うが、その時に提出した日本での語学学校の履修証明にあったサインの主が面接官の知り合いだったらしく、初級の2段階目から始めることが出来た。さすがに私も初心者クラスでABC..から始めるのは抵抗があったことと、大学受験基準の試験を早くクリアしたかったので、この履修証明書に助けられたのである。

語学コースは、初心者からドイツ語の先生になるためのクラス迄用意されており、生徒はもちろん世界各国からここに集まっている。カリキュラムは、1コース2ヶ月で午前中は授業、午後からは自由時間である。土日と祝日はお休みとなる。私は、日本で同じ語学学校であったこともあり、授業パターンは多少なりとも経験があるので戸惑うことも少なかった。クラスメイトは、世界各国から集まってきているが、日本人は全体の割合からすれば多い。後に学友であった世界中を放浪している日本人から聞いたのだが、アメリカの語学学校では、クラス全員が日本人なんてこともあるとか。ドイツ語自体は、習得する日本人があまり多くないようで、人気は今一つのようなのであるが、それでもクラスで1番多いのは日本人であった。私が1年間語学学校で授業を受けた経験では、日本人女性は大学生か就職後に退職した20歳代が多く、男性は企業からの駐在員で、1コース2ヶ月間をここでドイツ語をマスターするというプログラムで来ている人が多く、私のように会社を辞めてドイツの大学受験を目指しているというのは極めて珍しい。それ故、2ヶ月間しか授業を受けられずに成果を求められる企業人は、プレッシャーも多かったに違いない。私のように長期で計画している者とは異なり、これからドイツでの滞在が、ある程度保障されていることを羨ましいと思える反面、企業人であるがゆえの不自由さには同情もしたのである。そのような中でも印象深かったのは、西ドイツの公的留学機関であるDAAD*によって、東京の大学で交通を専門にしている教授と1コースを一緒になれたことである。私はデザイナーであったが、やはり鉄道好きというこ

とで、この教授とは話が合い、ルームメイトの大学生など、日本人数人で初秋の南ドイツへハイキングに出掛けたのは良い思い出となった。しかし、彼はやはり1コースのみの履修で、赴任先となるボンへと行ってしまったのである。しかしながら、彼からリニアモーターカーの実験線へのお誘いを頂いたり、帰国後も何かとお会いするなど縁がある。

日本人以外のクラスメイトは、やはりヨーロッパからが多い。驚いたのはスイスなどドイツ語を公用語の一つとしている国から来ている人が少なからず居たことである。スイスは、4つの言語を持つ国であるが、イタリア語圏やフランス語圏のスイス人はドイツ語を話す訳ではないようである。聞けばホテルマンとして来ているとか、地続きの国でありながらも、例えばラテン語系の地域の人には、観光に携わっていなければドイツ語を使う必要もないのであろう。またポーランドなど東欧でもドイツと深い関わりのある国から来ているクラスメイトもいた。同じクラスで最初に友達になったポーランド人は、祖父がドイツ人であるという。戦争が原因でポーランドで生まれて育ったが、冷戦の中彼は運良く家族でポーランドから西ドイツへ来ることが出来たと言う。彼は日本人のような寮生活ではなく、近くの高層住宅に住んでいて学校へは自動車に通っている。授業の終わった午後からはアルバイトをして奥さんと2人で生活をしていたのである。彼がドイツ語学校へ来ることが出来るのは、西ドイツ政府からの援助であるという。

改めて私が通ったゲーティンスティテュートを思えば、教師によって授業の質に多少なりともばらつきがあったのは否めないが、日本での留学ビザ取得が容易に出来ることや、入国後の手続きのプロセスをある程度任すことができ、更には大学入学に必要なドイツ語能力試験がここで受けられるという利点があったためである。それ以上に、現在のように情報が簡単に手に入る時代でもなく、留学斡旋業者の存在すら聞いたことがなかった時代である。全世界に展開している西ドイツの公的な語学学校であったからこそ、安心して留学もできたと言って良いと思う。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)

8. 総会報告と今後のイベント（事務局）

4月29日（水・祝）に県国際戦略課長様のご出席をいただいて総会が開かれました。特に問題点も指摘されず、すべて原案どおり可決されました。

今期の主な予定イベントとして

- ① 第6回ドイツフェスティバル in ぐんま
- ② ドイツ”フルート4重奏団”演奏会（前橋市中央公民館）
- ③ エアフルト独日協会訪日団群馬訪問（ホームステイ予定）

などが報告されました。

「第6回ドイツフェスティバル in ぐんま」については、このハイマートの「会長挨拶」や第2項・第3項で述べられているとおりです。

ドイツ”フルート4重奏団”の正式名称は“FluTeens”（フルーティーンズ）といい、ドイツ在住の日本人が指導をしている15～18歳の4人の少女のフルート演奏集団です。メンバーの1人が卒業を機に解散することになり、その前に日本各地でコンサートをすることになり、ドイツで“Goethe Institut”（ドイツ政府が設立した公的な国際文化交流機関）が援助しており、ぐんま日独協会も主催として演奏会開催に協力することになりました。多くの方々のご来場をお願いします。

エアフルト独日協会訪日団群馬訪問（ホームステイ予定）については、たった今情報が入り、訪日メンバーのうち3名の方が家庭の事情で今秋の旅行ができなくなり、来年の春か秋に延期することになりました。来年を楽しみに待ちましょう。

以上